

イネ白葉枯病情報第1号

令和元年9月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

尾張地域でイネ白葉枯病の発生量が多いほ場が見られます。
次年度の育苗時に箱施薬で防除しましょう。

1 発生状況

8月上旬に尾張地域の一部ほ場でイネ白葉枯病が多発しているとの報告がありました。その後、9月上旬までに尾張地域の広範囲でイネ白葉枯病が発生し、発病株率が100%に達する水田も多く見られることが明らかになりました。また、西三河地域や東三河地域でも、発生量は少ないですが、イネ白葉枯病の発生が確認されました。

2 イネ白葉枯病の病徴と感染経路

イネ白葉枯病の細菌はイネの葉縁にある水孔や傷口から侵入するため、感染すると葉縁部が白く枯れます（図1）。さらに病気が進行すると、葉先が白っぽくなるため、本病が多発した水田は一面に白くなります（図2）。

本病原菌は畦畔や水路に自生するサヤヌカグサという雑草の根に寄生し、越冬します。翌年、この雑草の生育とともにイネ白葉枯病の細菌が増殖し、一次伝染源となります。細菌は田面水や用水に入り、それらが風雨によって飛ばされてイネに感染します。そのため、梅雨期の長雨や台風による強風と大雨によって発生が助長され、特にイネが冠水すると本病がまん延することがあります。



図1 白葉枯病の感染葉



図2 激発水田での発生状況（全体的に白い）

3 防除対策

冠水しやすい水田では、用排水路の整備を行うとともに、一次伝染源であるサヤヌカグサを除草することが重要です。本年発生が見られたほ場では、秋期に耕起して刈株や被害わらをすき込んでください。また、イネの品種によって発病程度に差があるので、常発地ではイネ白葉枯病に強い品種を選択することによって、発生を抑制できます。愛知県の平坦地で栽培されている品種の本病に対する抵抗性は、あきたこまち、コシヒカリ、あさひの夢、ゆめまつりは中、あいちのかおり SBL と大地の風はやや強となってい

ます。

薬剤として、いもち病防除にも利用されているプロベナゾールやチアジニルまたはイソチアニルが有効です。発生ほ場では、次年度の育苗時に本薬剤を含む箱施薬（Dr. オリゼフェルテラ粒剤、ブイゲットフェルテラ粒剤、ルーチンエキスパート箱粒剤など）による防除を行いましょう。さらに、出穂3～4週間前に表を参考にして薬剤散布をしてください。

表 白葉枯病に対する主な生育期散布防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	本田での使用回数	FRACコード
オリゼメート粒剤	プロベナゾール	移植活着後及び出穂3～4週間前（但し、収穫14日前まで）	2回以内	P2
ルーチン粒剤	イソチアニル	収穫30日前まで	2回以内	P3
ブイゲット粒剤	チアジニル	葉いもちの初発20～7日前（但し、収穫45日前まで）	2回以内	P3
オリブライト1キロ粒剤	メトミノストロピン	出穂10日前まで（但し、収穫45日前まで）	1回	11

FRAC コードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRAC コードの詳細は、http://www.jcpa.or.jp/lab0/jfrac/pdf/code_pdf01.pdf を参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。